

## 第一章 戦前のことなど

「あれをよこせ」と泣き叫ぶ姿を思い浮かべると今でも涙が出る

私は平成二十三年十月で七十歳になった。「古稀」といって長生きを祝う歳である。私が生まれた昭和十六年は、十月に東條英機内閣が成立、十二月に日本軍が真珠湾を攻撃して太平洋戦争が始まった年である。

父は陸軍軍人で、津の三十三連隊に勤務する職業軍人であった。大正二年、現在の加東市上滝野生まれの父は、地元の桶羅義塾という私塾を出て、東播合同銀行（後に神戸銀行に吸収合併）に勤務していたが、昭和八年に勤務をやめ、志願して陸軍に奉職した。

入隊後は、ソ満国境（新京、ハルビン、チチハルなど）の守りにつくこと二回、日中戦争に一回、計三回外地勤務をしている。その内二回は、傷痍軍人として帰還している。長い間、顔に大きな傷あとがあった。

昭和十四年、中国河北省の日中戦線から負傷して、津の三十三連隊に原隊復帰した。その後、



祖父・勝治郎に抱かれて

地勤務の幸運に恵まれた。

私は、久居町で生まれた。親子三人で暮らしていた昭和十九年の夏、当時、三重県下で集団発生した小児麻痺（ポリオ）に罹り、津の陸軍病院に入院三カ月、引き続き京都大学病院に転院して六カ月、ポリオの治療を受けた。終戦前の、戦況厳しく、物資不足の折にこれだけの治療を受けることができたのは、父が陸軍軍人であったおかげである。

遠方の地で、戦中の厳しい時代に、父も母も、私の病氣治療に苦勞したに違いない。父母の出身地である滝野から父の妹が、私と二歳違いの妹の子守に久居まで来てくれたそうである。

父と同じ在所で大正八年生まれ、県立社高等女学校を卒業していた母と結婚し、終戦まで内地勤務で、伊勢神宮を守っていたそうである。三重県一志郡久居町（現三重県津市）の貸家に営外居住して部隊勤務、終戦後、陸軍歩兵中尉で除隊し、元の勤務先である当時の神戸銀行に復職した。

父は、二回の戦傷による本国帰還、父の兄が出征していたこと、長男の大病などが重なり、大戦中は、陸軍の学校（陸軍士官学校二十九期）と内



父・三郎と母・よしゑ

大勢の方にお世話になってポリオの治療を受けたが、どんな治療を受けたのか、まるで分かっていない。後に、三歳児を背骨が折れるほどきつく二つに折って、骨髄にビタミン輸液を大量

注入したと母が言っていたのを覚えている。可哀想で見てもおれなかったとも言っていた。ひどく心を痛めながら治療を見守ってくれたに違いない。

当時は、ポリオは小児麻痺といって怖い病気だと恐れられていた。誰も彼もが死なないで生き残ることだけを祈ってくれたのだと思う。

ポリオは、運よく生きのびたとしても、いろいろなところで後遺症が残る。私の場合、足の運動神経が失われ、右足の自由が全く失われ、ぶらぶらになった。知覚神経は残ったので、今でも、痛い、痒いは分かる。その後、大きな改善がなく症状が固定し、終戦後、滝野に帰り小学校に上がる直前まで松葉杖で過ごした。

あるとき、長い棒を持って立ったり、歩いたりできるところが分かった。最初は、松葉杖が重いので横着をして、棒

につかまり立ちをしていたそうだが、それを見て、母は松葉杖を取り上げ、棒の杖を与えた。その後しばらく経って、器用に地面と脛に棒を当て右足に体重を掛け、立ち上がったたり、歩いたりできるようになったそうである。といつても自分ひとりで歩けるようになったとは思えず、母は大変厳しい歩く稽古を強要したに違いない。

母は松葉杖が楽であるのはよく分かっていたが、私が将来困るであろうとこの方法を頑なに強要した。「えらいおかんだ」と思う。

当時の記憶はほとんどないが、本当は大変だったと思う。松葉杖は土間の「鼠入らず」（鼠が入らないように頑丈に作った米や味噌の保管庫）の高いところに隠してあるのは分かっていた。「あれをよこせ」と泣き叫ぶ姿を思い浮かべると今でも涙が出る。「きついおかん」であったに違いない。父も妹たちもみんな辛い思いをしたことだろう。

※北播の人は母親のことを「おかん」と言う。郷土の詩人坂本遼の「春」という詩に出てくる「おかん」は有名。